

現代の ことば

かわせ
川瀬

いっし
慈

モハメッドは私の定宿のレセプションで働く寡黙な青年であった。2階の窓から身を乗り出し、小型のラジオを片手に近づけ、ストリートを歩いている人々を眺め、時折狭いレセプションの隅でメッカに向かっている祈りを捧げる。同じように2階の窓から身を乗り出した私と目が合つと、はにかむような笑顔を浮かべ、すくなく目を引く込めてしまう。モハメッドの婚約者ベテレハ

ムは、ベティという愛称で呼ばれ、彼とは対照的で快活、えくぼが印象的であつくりと笑つた。タ刻、ベティはモハメッドの職場に彼を迎えにやってくる。二人は仲良く手を握り、何するともなく、日が暮れるまで近所をぶらぶら歩いた。

あるシンフォニー



リディーはクリスチャンであり、ムスリムは2割にも満たない。敬虔なクリスチャンとムスリムのカッパルは、小さな街のちょっとした話題でもあつた。

コンダールにおいて、異なる宗教徒間の通婚は決して奇異ではないが、かといつて頻繁にあることもない。食の禁忌の相違や、儀礼的な会食をめぐる異教徒間のトナブルについてたまに話に聞くと

もある。異教徒や被差別の職能集団との通婚に関しては、アムハラ語の言いまわしで「家にひびが入る」と表現され、好ましいこととはみなされない。

普段の生活で難しいことはないのかと、私はおせっかひにも二人になすねる話があつた。両者の親族が二人の仲を、さらに結婚の計画をよくは思っていないらしいが、ベティは、改宗するつもりはな

く、そのかわりモハメッドを知る努力をしている、このことであつた。そして、エチオピアの国民的なポップ歌手であるティ・アフロが異教徒間の恋愛を歌ったヒット曲を口ずさみ、これみよがしに私に微笑みかけるのであつた。「眞素な道りかもしれないけれど、こは自由な家へ二人が暮らすには十分な広さ／限りない愛を誓ひましよう／あなたはおあなたの信仰を持ち、私は私の信仰を持つ／さあ共に暮らしましよ」

ある日、婚約者をレセプションへ迎えに来たベティはいつものように私に笑顔で話しかけてきた。翌朝モハメッドとともに陸路でスタータンに向かい、そしていずれは欧州をめざすのだと言う。スタータンにはモハメッドの親族がいるとの話であるが、特に具体的な計画に基づいた旅ではないらしい。

モハメッドはいつもの通り黙つたまま。静謐なモハメッドと太陽のように明るいベティ、それぞれの瞳が私を貫く。二人の瞳はどんな未来を見つめていたのだろうか。

エチオピア正教の教会からの重厚な歌唱が太鼓とシスタームのアクセントを刻みつつ、薄明の高原に響き渡る。モスクからは礼拝を呼びかけるアザンが、音割れしたスピーカーを通して繰り返して流れてくる。音は重なり、離れ、交わる。その不思議なシンフォニーは、私の祈りとともに、コンダールの街を、二人の出發を、祝福で包み込んでいく。

(国立民族学博物館助教、映像人類学・アフリカ研究) +